

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成二十五年九月一日発行（毎月一回・日発行）
第二十五号（通巻第……号）

鈴



ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第233号

9. 2013

金綺羅

品川 鈴子

靈迎ふ芋殻の梯子がたつきて

かく軽し芋殻梯子を登る靈

病葉の一枝見捨てる祖父の松

病葉に新酒注がん錦松



糠漬けもメロンもそつぽ瓜嫌ひ

台風にへたる金綺羅ハイヒール

列島を北まで舐めて台風禍

台風報夜を徹して組閣成る

刈上げの白髪に狎れて鉄漿蜻蛉

虎の巻「SEX」の法医本曝す



玉鈴

吟

大阪 古林田鶴子

病癒えし句友と見上ぐ梅雨晴れ間
馳けつこのはじける歓声梅雨晴れ間
風かをる祖父母も招く初給与
青時雨クイズ解き合ふ老人会
海芋咲く取り残ざれし廃屋に

香川 細川知子

梅雨の夜半小犬キュインと甘え泣き
緑陰の子どものまなこ猫さがす
水無月の展示ガラスに額のあと
梅雨満月仔犬の耳のピンと立つ
玫瑰の身の内流るさぬきの血

兵庫 細野恵久

色の朝顔咲くよ水の底
蟪蛄の陣取り今朝は右に寄る
案山子立ち案山子に紛ふ人も立つ
手話の間に葡萄一粒づつつまむ
数へずに釣銭しまふ秋の暮

愛媛 松井洋子

見下ろせる十五万石梅雨籠り
青枇杷や鳥しか取れぬ谷間に
茂みより一気になへ夏燕
相愛の青条揚羽高みまで
梅雨寒に倍音響くカテドラル

埼玉 松木清川

岩風呂の上を一閃岩つばめ
忠雄碑著莪の花咲く中に立つ
どぶ川に亀の子三つ首もたげ
昔今同じ頸くび城まきの青田かな
梅雨晴れの今日の句会も黒一点

兵庫 松村晋

練塀を越えて色づく夏蜜柑
蚯蚓入れ籠を仕掛ける里の川
紫陽花や介護の妻の声掠れ
出会ひあり別れありけり額の花
額の花絵手紙くれし友逝きぬ

東京 松本アイ

悠然と牡丹一花ホームの庭
天空の皿に盛りたしさくらんぼ
季待ちてゆったり開く御衣黄桜
コーヒーを淹れるが如く新茶入れ
子供の日歌詞は臙げわらべうた

愛媛 松本恒子

走り梅雨よろけて見上ぐスカイツリー
子ら発ちてもとの静けさ草茂る
不動明下おん身濡れゐる滝の陰
八十路来て母に似て来し更衣
空井戸は城の抜け道木下闇

愛媛 三浦澄江

胸にペン光らす女医や夏来る
桐の花振り返る度高くなる
名水の郷さとに父母亡し花は葉に
取り消せぬ言葉反芻花茨
源流水飲む夏山をかたむけて

兵庫 水野範子

時計草そよぐ秒針バス停に
首の無き石仏転ぶ梅雨の寺
ビル風によく飛びたがる夏帽子
青梅をリュックに詰め来巫女笑顔
それぞれの色を競ひて照若葉

兵庫 水野弘

木道を右へ左へ杜若
睡蓮の池おほひけり青い空
春雨や思ひ出たどる夜の街
音立てゝ街路を走る楠若葉
朝日覆ふ東へ東へ梅雨の雲

香川 三橋早苗

バス待ちに木洩れ日カフェのアイステイ
宣教師夫人のレシビ豆の飯
電線に並びて止まる燕の子
蚊遣りして怪談話傾聴す
手繋ぎで仲間を増やす布袋草

茨城 三輪慶子

露茹でるしきりに思ふ母の事
瓜刻む生きてるうちは片付かず
手秤りは確かな道具瓜刻む
串打たれあゆ鮎らしく焼かれけり
苔の花楡の木陰のうすあかり

埼玉 向江醇子

日盛りを三輪車に変へた夫が行く
美みしき見目は持たねど更衣
流はりとして男も日傘持つ時代
卵の花や陽気な我も秘か事
吹き渡る風の涼しき願ひ寺

兵庫 村田とくみ

書く書かぬ遺言談議山笑ふ
草餅とメモに大きく母の旅
母の日のラジオ和室にわらべ唄
同級会の知らせそろそろ燕も来
わくわくの刻給食と一年生

大阪 師岡 洋子

窓若葉しやしやしき進むラシャ袂
紹をならべ呉服売場の静かなり
薙刀の一団端午の京都駅
白玉や身内ばかりの七回忌
母在さば椅子はこの位置薔薇の風

東京 安田とし子

埋れ木の盆つややかに葛桜
老鶯や訛言葉に豆を買ひ
こゑ交す人みな優し路の里
対岸に鶯の抜き足梅雨に入る
声涼し朝の慣ひのスクワット

香川 横内かよこ

青梅雨に室内干しのユニフォーム
梅雨闇や未だ領土で唾み合ふ
摺り足のまた引つ掛かり入梅す
願掛けて誰より派手な日傘買ふ
空梅雨に溜め池眺む道の駅

大阪 吉田光子

水占い沈む沈まぬ青葉影
遷宮祭 大社の杜の夏衣
小満の社殿かつお木真新し
薫風裡式庖丁の鯛おどる
夏羽織処分リフォーム決めあぐね

兵庫 明石文子

掌で螢かこみて息つめて
対岸の螢の乱舞静まりぬ
デュエット螢の宿はあの辺り
虹立ちてジャズの演奏宙に舞ふ
足踏みのミシンの修理雲の峰

愛媛 足利淳子

句座の寺新大屋根に夏燕
法要の経の聞ゆる夏木蔭
捺印し怖き検査や青葉冷え
寺の庭紫陽花の彩だしくし
嫁ぐ娘に水無月の塩瀬帯

兵庫 荒木治代

合併に消えし村の名梅雨寒し
うかど出し恥の一言どつと汗
汗しとど唸る太夫の山場なる
甚平の多弁悲しさ見せまじと
山径のいよいよ細し藪蚊寄る

大阪 荒木 稔

埋めもどす飛鳥の古墳竹落葉
御当所富士はるかに置けり麦の秋
早梅雨矢つぎ早なる地震の報
尻切れ蜥蜴車道よぎるを見とどけり
のびちぢみして白日の蚯蚓急く

大阪 居内真澄

紫陽花をバケツで配る両隣
手作りの糸目ほつれて更衣
戦争を知らぬ役人沖繩忌
善人の仮面で過ごし走馬灯
北国のアスパラの色やんはりと

大阪 池田かよ

俳諧につなぐ命や更衣
言論の自山へうまい生ビール
サングラス海女の留守小屋覗きけり
おしやべりの止まらぬ姉妹明易し
走り根も階のひとつや滝の道

兵庫 池田久恵

園児らのそら色帽子衣更え
つゆ草は今日も紫朝の色
逆光に顔は見えずに夏帽子
アスファルト走る車の梅雨の音
一枝の茱萸生ける部屋実は赤く

香川 石川裕美

空腹に流し素麺流れ来ず
芝刈るや鱗型へと刈り上がり
大百足虫退治はなぜか妻の役
黒文字に葛饅頭出て茶の稽古
お地藏に雨しとしとと若葉冷

大阪 石橋萬里

さくらんぼ天地無用の宅配使
滝壺を前に尻込み留学生
滝仰ぎ留学生ら十字切る
苔の花粗方読めぬ芭蕉句碑
薫り嗅ぐ泰山木は蠟細工

兵庫 市橋 香

代田消え箱に治まる田植苗
学生の待ちこがれたる夏休
暗がりの何処からとなき蚊の気配
雲の峰ぐんぐん伸びよ旅へ発つ
道の辺の誰にともなき落し文

愛媛 伊藤マサ子

一の門手前にありて桐の花
雨しとしとと南天の花こぼる
古家の礎石の遺り沙羅の花
般若心経白きよらかに花空木
塚の辺に清き風あり野萱草

鈴の奏

品川鈴子選

六棟のアパート群や梅雨に入る 埼玉 松岡悠喜夫

墓に来て妻の忌らしく梅雨空に
娘の禱いよいよ長し梅雨の墓

夕風や甚平の肩にインコゐて
手作りの椅子に腰かけあさりとり

著莪の花帳場格子のほの暗き
塔頭の玄関にありビール箱

日もすがら青藻たゆたう鯉潮
風薫る比叡よりの水奔る街

里坊の庭石横切る青蜥蜴
夏座敷一間占めたる座主の輿

青銀杓影なす最澄産湯の井
生活具売る師に黙礼終戦日

師の通夜に友ら饒舌夕薄暑
六月の花婿熱唱「君の傍に」

あつぱつぱ一枚眠る祖母の箆笥
川烏滝に飛び込み青光り

揺れ揃ひ「子犬のワルツ」罌粟の花

埼玉

松岡悠喜夫

兵庫

福島 悠紀

大阪

三浦喜久子

兵庫

増本 明子

兵庫

植田 雅代

薔薇の香に混じりてにおうゴミ出し日

老母と観る打ち上げ花火病院で
大方は捨てる句ばかり柿の花

アカシアの花房雨にずっしりと
帰りたしふるさとは蝦蛄うまき頃

孫の着る妣の仕立てし藍浴衣
人は人それぞれ似合ひの夏帽子

見舞はるる骨折の友梅雨籠り
万緑に山中温泉包みたる

暑い日は熱い物食ぶ祖父の伝
紫陽花を観てゐる吾も萎えてをり

検診の帰り立ち寄るソーダー水
一病を持つ者同志菖蒲湯を

亡き兄の遺品にあつたアロハシャツ
地下鉄口探す新樹の御堂筋

一葉をゆりかごに生れてんとむし
父と子に記憶の筋の蜚川

柿の花気圧に弱き偏頭痛

兵庫

先山 実子

大阪

丹後みゆき

大阪

宮村フトミ

兵庫

磯田せい子

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川 鈴子 評
四句 十句 林 哲夫 //

*選句は全て 品川鈴子

夕風や甚平の肩にインコゐて

松岡悠喜夫

夕風に着流しの甚平が翻り、その肩には鮮やかなインコがいて、主の気心を知り尽くした家族の一員である。一見浮世絵のような飄逸の姿は、世俗にこだわらぬ風流人に違いない。或るいは永の境涯を過ごした後、住み慣れたアパートを移り、妻に先立たれ子達もそれぞれに自立。鳥と翁は掛替えのない連れかも知れない。軽みの余生。

塔頭の玄関にありビール箱

福島 悠紀

塔頭とは禅宗の塔を司る大寺の僧。転じて山内にある別院の小寺院をそう呼ぶ、たまたま土間にはビールが箱で配達されて、禪域の暮らしにも親しみを感じる。

夏座敷一間占めたる座主の興

三浦喜久子

座主とは学徳ともに優れた僧で一座の上首、又は大寺の住職の公称で明治以前は官命により補任された。その興が

尊い乗物として寺の畳座敷に一室を占めている。夏座敷の設えで、襖は簀戸に変えられ、金蘭の縁取りの御簾が回らされた荘厳さは、薄暗い寺領では目を奪われる一廓。

師の通夜に友ら饒舌夕薄暮

増本 明子

通夜、それも恩師のお通夜となればしんみりと悲しみ合ふべきところ、この恩師は多分明るく、ざつくばらんな方だったのでしょう。

年令的にも天寿を全うされたのであれば、むしろお目出度い大往生かもしれません。弟子共が恩師の悪口をさかなにしやべつている声が聞えてきそうです。夕闇が濃くなればアルコールも入って一層かしましい事でしょう。

老母と観る打ち上げ花火病院で

植田 雅代

入院中のお母様ですが、この日はきつと気分もよく親子で楽しい時間を過ごされたことでしょう。いくつになってもけ親は娘の事が気にかかり、娘はけが少しずつ老いて行く

のを心配し乍ら見守っております。老母の二文字にお母様へのいたわりを感じます。

孫の着る妣の什立てし藍浴衣

先山 実子

亡くなられたお母様は和裁がお上手で愛娘のために縫われた藍浴衣が、今はお孫さんのお役に立っている―親子四代引継がれたことになりました。サイズに融通性のある和服ならではの事ですが、お母様への感謝の気持が良く出ていてほのぼのした暖かみを感じます。

暑い日は熱い物食ぶ祖父の伝

丹後みゆき

真夏でも熱い物を食べられたお祖父様は、何事に対してもしつかりしたお考えをお持ちだったと思います。小学唱歌“村の鍛冶屋”に“あるじは名高きいっこく者よ”の一節がありますが、明治生れの方には良い意味での一刻者が沢山居られました。作者もお祖父様の良い性格を引継がれて、熱い物を食べてこの夏を乗り切ってください。

紫陽花を観てゐる吾も萎えてをり

宮村フトミ

梅雨の頃は、元気の良かった紫陽花も、土用の旱天にはぐったり、観ている作者もぐったり。でも日が落ちてから水をやると、紫陽花は又息を吹き返す様に、作者も亦元気を恢復して明日から活躍される紅でしょう。

地下鉄口探す新樹の御生筋

磯田せい子

御堂筋も私達が通勤していた二十年前とは打って変って新しいビルが建ち並び、テナントの名前も多くが变っております。銀杏並木の緑が眩しいですが、目印にしていた銀行も名前が变り、地下鉄の入口もうっかり通り過ぎてしまいました。

龍野山滴る町でもろみ買ふ

木本 修

鶏籠山の緑滴る龍野市は名産の醤油や素麺で知られております。醤油の醸造所や倉庫を見学してもろみを買うのも楽しみの一つ。もろ胡瓜で冷酒をキューツとやることを考えると夕食が待ち遠しいことです。